
サマーガーデン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サマーガーデン

【Nコード】

N5401N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

イギリスの夏。庭の手入れをしているサリーは道を通った日本の若者と恋に落ちる。その恋の行方は。

第一章

サマーガーデン

雨の多いイギリスでも。夏は爽やかな日が多くなる。

その夏のある日だ。サリー＝リーマンは自宅の庭に出て草花の手入れをしていた。久し振りに晴れたのでその機会を逃さなかったのだ。

それで花や草を見て手入れをしていた。傍には飼っているコリーのヘンリーが気持ちよさそうに寝ている。そんなのどかな中で過ごしていた。

不意にここでだ。家の中から声がしてきた

「サリー」

「何、お母さん」

「どう？お庭は」

こう問うてきたのだった。

「奇麗？それとも荒れてる？」

「思ったより奇麗よ」

その茶色の豊かな髪を動かして振り向いた。青い目は湖の様であり細面の顔は白くだ。白いふわりとした服を着ている楚々とした美女であった。

それがサリーだった。彼女が庭の手入れをしているのだ。

その彼女にだ。家の中から彼女が少し年配になったといった感じの中年の女性が声をかけていたのだ。それが彼女の母のアンだった。アンは少し庭に出てだ。そして言うのだった。

「そうね。奇麗ね」

「そうでしょ？結構ね」

「長い間お手入れできなかったからどうかと思ったけれど」

その庭は確かに比較的整っていた。雑草は少なく花も荒れていない。そうした状況でだ。その庭を見ながら話をしていくのだった。

「それじゃあね」

「どうするの？」

「薔薇。植えようかしら」

こう言うのだった。

「薔薇をね。どうかしら」

「いいわね」

サリーは母のその言葉に応えて頷いた。

「それじゃあ薔薇をね」

「色は何がいいかしら」

「白はどうかしら」

それをだというのだ。こう母に提案する。

「白薔薇ね。それでどうかしら」

「白ね。そうね」

アンもだ。娘の話を聞いて言った。

「それがいいわね。このお庭にも合うし」

「そうよね。だからね」

「それにお父さんも好きだし」

アンはここで夫の話もするのだった。

「だからいいわね」

「そうよね。じゃあ白薔薇ね」

「それにしましょう」

こう話してであった。サリーは庭に白薔薇を植えることにした。

花は他にはカーネーションやマーガレット等もある。そこに薔薇も
というのだった。

そして薔薇を植えはじめた。やはり横にはヘンリーが寝ている。
そののどかな中で薔薇を植えているとだった。ふと外から犬の鳴き
声が聞こえてきた。

「ワン、ワン」

「あら？」

犬の鳴き声だった。それを聞いて外を見るとだった。そこにはだ。

白い犬がいた。何か狼に似ている。サリーの知らない種類の犬だった。

「どの犬なの？」

「ああ、これですけれど」

そしてだ。今度は人間の声がしてきた。何処かたどたどしい英語であつた。

「秋田犬です」

「秋田犬？」

「はい、そうなんです」

こうその少ししたどたどしい英語で返って来る。

「実は」

「秋田犬ですか」

「日本の犬です」

そうだというのである。

「日本の」

「日本ですか」

それを聞くとであつた。サリーもその記憶を辿った。そして思い出した国は。

「アジアの東の」

「はい、そこです」

「何か随分と古い国だと聞いてますが」

「よく言われていますね」

また言葉が返ってきた。そしてそこにいたのはだ。

第二章

黒い上着に白いズボンを身に着けているアジア系の青年だった。細長い頬の痩せた顔で目は吊り目だ。しかも細く狐を思わせる。細く薄い眉も吊り上っている。

髪は茶色でその髪を少し伸ばしている。背は一八〇近く随分とすらりとしている。その青年がそこにいたのだ。

「僕の国のことは」

「ええ、イギリスよりも歴史が古いんですよね」

「二千年はあるって言われてますね」

「ローマ帝国より昔ですか」

「ああ、そうなりますね」

そのアジア系の若者はそれを聞いてであった。こう言うのだった。
「そういえば」

「二千六百年あるというのは本当ですか？」

「いや、そこまであったかどうかは疑問ですが」
流石にそれは確かに言わなかった。

「しかし歴史は古いですね」

「そうですね。その国からですね」

「はい、来ました」

こう述べるのだった。

「親の仕事の関係で」

「それで来たのですね」

「来たのですか。ただ」

「ただ？」

「雨多くないですか？」

彼は言う。

「それもかなり」

「そうですね。この国は雨が多いですよ」

「日本も多いですけどね」

「あっ、日本ですか」

「はい。梅雨があります」

今度は日本の気候についても話した。

「それに台風もあって」

「台風ですか」

「かなり多くて。ただ」

「ただ？」

「ここはそれ以上ですね」

その雨の話をさらにする。今は晴れているがだ。それでも雨の印象が強いのだった。

「本当に」

「そうですね。けれどそれだけに」

「それだけにですか」

「晴れた日は嬉しいですね」

にこりと笑ってサリーに話してきた。明るく親しい笑顔だった。

「本当に」

「はい。それでですけど」

「それで？」

「お名前は何というのでしょうか」

彼に尋ねてだった。そうしてだ。

「私はサリーといいます」

「サリーさんですか」

「サリー＝リーマンといいます」

自分の名前も話した。

「ずっとここに住んでいます」

「リーマンさんですか」

「はい」

にこりと笑って述べた。

「そういいいます」

「わかりました。それで僕は」

「貴方のお名前は？」

「石上といいます」

まずはその姓からだった。

「石上京介といいます」

「石上さんですね」

「はい、宜しく御願います」

こう話してであつた。そしてだ。

この日本人石神京介は晴れの日にはいつも庭の前をその秋田犬を連れて散歩してくるようになった。

そのうえでだ。二人で話をする。彼等は次第に親密になってきていた。

「そうですか、イギリスは」

「はい、雨が多くて」

雨の話以外にも色々とするようになっていた。

第三章

「それで昨日は」

「そういうことがあったんですね」

「はい、いや大変でした」

京介は苦笑いを浮かべてサリーに述べた。

「本当に」

「そうですね。やっぱりイギリスの食べ物とは日本の方の御口には」

「それでもかなり慣れましたけどね」

「そうですか」

食べ物や本、そして二人のプライベートな話もしだしていた。そうしてその関係をさらに親密なものにさせた。二人の仲はかなりいい感じになってきていた。

そんなサリーを見てだ。母のアンは彼女にこう言うのであった。

「彼氏？」

「彼氏って？」

「あの子日本人よね」

夕食の時にだ。テーブルの向かい側にいるサリーに笑いながら言うてきたのである。食べているのはボイルドベジタブルとスープ、それにコールドチキンとパンである。

「そうよね」

「見てたの？」

「見えてたわよ。日本から来た人が近所にいるって聞いてたけれど」

「そうなの。あの子の家だったの」

「あの子ね」

この言葉にだ。アンは笑顔で応えてきた。

「成程ね」

「成程にって」

「いいんじゃない？あんたがよかったら」

温かい笑顔であった。その笑顔での言葉であった。

「それでね」

「それでって」

「だから。あんた今丁度彼氏とかいないでしょ」

「それはそうだけれど」

「じゃあいいわ」

母のペースだった。サリーも今はアンに言われるままだった。

「それでね」

「いいの」

「そう、いいの」

こう言うのだった。

「あんたがよかったらね。悪い子じゃないし」

「そうよ、悪い子じゃないわよ」

サリーからの言葉だった。自然に出てしまっていた。

「あの子はね」

「だからいいわ。ただ」

「ただ？」

「年下の子なんてね」

アンが次に言うことはこれだった。歳の差だった。

「意外ねえ。彼あれでしょ？ハイスクールの生徒さんでしょ」

「あっ、カレッジよ」

大学生だというのだ。

「美術のね。そっちの生徒さんなの」

「あら、そうなの」

「そうよ」

食パンにバターを塗りながらだ。そのうえで母に答える。

「そうなの」

「そうだったの。けれどそれでもね」

「私より一個下よ」

言われる前に自分で言ってしまったアンだった。つついだ。

「実際ね」

「やっぱり年下なのね」

「そうなの。年下なの」

「意外ねえ。やっぱり」

「やっぱり？」

「あんたが年下の相手を好きになったのはね」

「別に好きになってないわよ」

それは否定するサリーだった。

「別に。あの子とは」

「あの子っていう時点でもうわかってるわよ」

必死に否定する娘の言葉は制してしまった。それも一言でだ。

「残念だったわね」

「うっ、しまったわ」

「わかってるわよ。そういうことでね」

「そういうことで？」

「いいじゃない、それでも」

「いいの」

「お互い好きだったらね」

それならばいいというのであった。こうしたことには物分りのいいアンだった。優しい笑顔でボイルドベジタブルのポテトを食べながらだ。そのうえで言うのである。

第四章

「それだったらね」

「いいの」

「いいわ。それじゃあしつかりしなさい」

「ええ」

母の言葉にそのまま頷く。そうするしかない状況だった。そんな夕食だった。

二人は毎日、晴れの日にはサリーの家の庭のその低い緑の木々での囲いを挟んでそのうえで楽しく話をした。深い仲ではないがそれでもだ。二人は楽しんでいた。

「そうですか。ロンドンにも行かれたことがあるんですね」

「石上君はまだですか？」

「今度行こうと思ってますけれど」

「そうですか。それだったら」

ここでだ。サリーは自分から言った。自分が年上であるということともあってだ。お姉さんのな感情を抱いてそれで言ってきたのである。

「その時は私が」

「リーマンさんが？」

「はい、案内させてもらっていいでしょうか」

こう申し出たのである。

「それで宜しいでしょうか」

「いいんですか？」

京介はサリーのその言葉を受けてだ。驚いた顔になり目をしばたかせて言うのだった。

「それで」

「はい、私でよかったですら」

にこりとしての申し出だった。

「どうでしょうか」

「じゃあ」

一呼吸置いてだ。京介は言うのだった。

「御願います」

「はい、ではそれで」

こんな話をしてであつた。二人でロンドンに行ったりもした。しかしやはり二人は庭の木々を挟んで話をするのが常だった。その中でだ。

ある日だ。京介は沈んだ顔で庭の前に来てだ。そうして言うのだつた。

「困りました」

「困った？」

「急に決まりました」

こう言うのである。

「それでなんです」

「随分と言にくいことみたいですね」

「はい、実はですね」

それでもだ。言うのであつた。彼も覚悟を決めて言った。

「帰ることになりました」

「帰る？」

「はい、日本にです」

その沈んだ顔での言葉だった。

「日本にです」

「それは。本当ですか」

「残念ですが」

こうサリーに言うのだった。

「とても」

「あの、それじゃあ」

「もうすぐここを去ることになります」

こう言うのだった。

「もうすぐです」

「そうですか」

「また機会があれば御会いしましょう」

京介は己の気持ちを押し殺してだ。そうしてであった。

「また」

「はい」

そしてサリーもだ。己の気持ちを隠してだ。そうして言うのであった。

「それでは」

「もう少しここにいますが」

これは言うのだった。

「ですがそれでは」

「その時には」

こんな話をしてからだった。サリーは沈んだ顔になったままになつてしまった。そしてアンはそんな娘を見てすぐに気付いたのであった。

「彼、日本に帰るのかしら」

「それは」

「そうね。帰るみたいね」

「そうみたいなの」

沈んだ顔のままだ。母の言葉にこくりと頷いた。

第五章

「お父さんの仕事の関係でね」

「じゃあどうするの？」

「どうするのって？」

「貴女はどうするの？」

こう娘に問うのだった。

「それで」

「それでって」

「何なら留学する？英語教師で」

「英語教師って」

英語圏の人間ならできることだった。英語の教師として世界の国に行くことができる。それに関してその国の言葉を喋れなくてもいいのである。

「それで？」

「貴女その資格持ってるし」

「ええ」

「じゃあ丁度いいじゃない。カレッジを卒業したらね」

「日本に」

「行って追いかけたらどう？」

こう娘に提案するのだった。

「それで」

「けれどそれは」

「想ったら何処までもやりなさい」

真剣な顔でだ。娘に話すのだった。

「ジュリエットになりなさい。ただしハッピーエンドになりなさい」

「ハッピーエンドのジュリエットに」

「それになりなさい」

こう娘に言うのである。

「わかったわね」

「そうなの」

「その時はね。わかったわね」
娘の背中を押す。心でだ。

「それじゃあね」

「ええ。じゃあ」

彼女も母の言葉にあまり積極的ではないが頷くのだった。そうしてだ。

それからまた数日経ってだ。また庭と道、それぞれの場所で二人は話をした。

「三日後になりました」

「三日後ですか」

「日本に帰ります」

京介は寂しい顔でだ。サリーに告げた。

「三日後になりました」

「そうですか。日本にですね」

「親父はイギリスに来ることはないみたいです、もう」

「日本に戻られてそれから」

「また海外に転勤になるかも知れませんがイギリスは二度とないそうです」

「わかりました」

「本当に。また縁があれば」

こう話してであった。そのうえでの言葉であった。

「御会いしましょう」

「あの」

しかしであった。ここでだ。サリーはついその言葉を出しそうになった。

後で自分も日本に向かうとだ。こう言おうとした。

だがそれは止まってしまった。どうしても言えなかった。言葉を出せなかった。

それに戸惑っているとであった。京介の方から言ってきたのだ
た。

「ではまた」

「はい……」

どうしても言えないまま京介の別れの言葉を受けた。そしてそれ
から彼は庭の前に出ることはなかった。姿を見ることはなかった。

三日経った。サリーはその間にだ。遂に決意したのだった。

「行くのね」

「ええ」

母の言葉にこくりと頷くのだった。

「今からね」

「そう。じゃあね」

「まさか自分がこんなことするとは思わなかったけれど」

「それでもね。思ったらね」

「行かないと駄目なのね」

「恋や愛は手に入れるものなのよ」

ここでだ。このことも娘に告げたのだった。

「手に入れて。それから与えるものなのよ」

「手に入れてから」

「まずは手に入れなさい」

娘に告げる。その白い家の中でだ。その窓から緑の庭を見る。だ
が今庭は雨である。犬は家の中に入れられて面白くなさそうに寝そ
べっている。

第六章

「わかったわね」

「ええ、それじゃあ」

こう話をしてだった。サリーは日本に向かう用意をはじめた。彼がいる場所はまだ既に彼自身から聞いていた。後は手続きをしてそこに向かうだけだった。

その準備をしながらこの日はだ。晴れたのでそれで庭の手入れをしていた。白い光に緑の庭が照らされている。しかしそこにいるサリーの顔は浮かないものだった。

愛犬も同じだった。その主の傍で寂しい顔をして寝ている。そんな状況だった。

その彼女の傍にだ。誰かが来た。庭の向かいにあるその道にだ。そしてこう声をかけてきたのだった。

「あの」

「えっ!？」

聞き慣れた声だった。だからこそ我が耳を疑ったのである。

「その声は」

「実はですね」

思わず顔をやるとだった。彼がいた。彼は照れ臭そうに笑ってそこにいたのだ。

「日本に戻るのは父だけになりました」

「お父さんだけですか」

「はい、日本に戻るっていつでも何かすぐにこっちに戻るってことになりました」

「お話が変わったんですか」

「そうなんです」

こうサリーに話すのだった。

「それで」

「そうだったのですか」

「あの、それですね」

「また。こうしてですね」

「お話しても宜しいですか？」

サリーへの言葉だ。

「また」

「はい、ただ」

「ただ？」

「今まではこうして木を挟んで、でしたよね」

サリーからだ。こう言ってきたのだ、

「これまでは」

「ええ、それが」

「ですがこれからはですね」

「どうだというのですか？」

「中でお話しませんか？」

穏やかに笑ってだ。京介に話す。

「これからは」

「中といいますと」

「お庭の中です」

そこでだというのだ。

「そこで。どうでしょうか」

「お庭で、ですか」

「はい、石上さんさえよければ」

「リーマンさんさえよかったら」

京介もだ。ここで応えて言った。

「御願います。そうですね」

「何か？」

「いえ、何もありません」

言おうとしてだ。止めた京介だった。

「失礼しました」

「あつ、そうですね」

だがここでだ。サリーは言った。自然と言葉が出たのだ。

「これからお話されるのなら」

「お話するのなら？」

「もう姓で呼び合うの止めませんか？」

こう京介に言ったのだった。

「お庭でゆっくりとお話するのですし」

「それならですか」

「はい、まず私はですね」

「サリーさんですね」

「そう呼んで下さい。そして」

「僕のことは京介と呼んで下さい」

サリーが言うより先にだ。彼から言ってみせたのである。

「それで」

「わかりました。それではそれで」

「御願いますね」

「それなら。京介君」

穏やかな笑みと共に呼んでみたサリーだった。

「これからあらためて」

「御願いますね。それでは早速ですが」

「はい、早速」

「お庭にいらして下さい」

サリーからだった。京介を誘う。

「今から」

「はい、それじゃあ」

「お茶とクッキーもありますから。私が焼いたクッキーが」

何気に切り札を出しているサリーだった。彼女は自覚していないがそれでもだ。これはそのまま京介を射止めるものであった。

そして京介もだ。それに見事に射止められてしまった。

そのうえでだ。目を輝かせて頷いたのだった。

「クッキーですか。サリーさんが焼いた」

「紅茶も淹れますけれど」

「御願います、それなら」

「はい、それでは今から」

こうして庭で楽しく話す二人であった。そしてそれを見てアンはだ。にこやかに笑うのだった。娘の今はじまった幸せを見ながら。

サマーガーデン 完

2010・5・30

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5401n/>

サマーガーデン

2010年10月8日14時04分発行